

阿南大将を偲ぶ

— 初一本は必ず取れ —
(偕行 昭和34年10月号)

奥本 實 陸士54

編集委員長…9月20日に実施された市ヶ谷台慰霊祭に参加された奥本實氏陸士54の長男康大氏から、「偕行」(昭和34年10月号)に掲載された特集記事「終戦殉難者の霊を弔う」のコピーを頂いた。その中にあつた奥本實氏の「阿南大将—初一本は必ず取れ—」という記事を掲載させて頂く。

昭和16年の夏、私が歩兵第二百十六聯隊付として、少尉で中支の南昌に従軍していたころ第十一軍(呂集団、漢口)の軍司令官としてこられた阿南惟幾中将が、初度巡視に南昌(第三十四師団、長、大賀茂中将)を訪ねられたときのことである。私は阿南軍司令官の儀仗衛兵司令を命ぜられて、阿南閣下の護衛を夜を徹して行ったときである。隷下全部隊の閲兵を終えられた軍司令官は、同夜南昌のホテルに引き揚げられ、団隊長会同を終つた後、小川権之助聯隊長(二十四期、終戦時中将南千島師団長、現三重県員弁郡大町長)とお二人で話されておつたが、衛兵司令の私を呼び出されて、小川聯

隊長の註釈で、私の戦闘状況を一々詳細にお聞きになった。私が三十四師団の十二、十三号作戦について実戦経験をご説明申し上げると、「ご苦労であつた」とコップにビールを軍司令官手ずからお注ぎして頂いた。私は完全武装の俣の姿であつたが、感極まつておし頂いた次第である。そして阿南軍司令官は、次のように私にお諭しになつた。

「君は剣道を、どういう風にやるか?」「はい、私は有段者であります。剣道は大へん好きであります」「そうか、それは大へん結構なことだ。しかし、初一本を必ず、わがものにするが大抵三本勝負で試合をするが、二本さえとればそれでよいのだが、しかし私は、これでは満足しない。二本目、三本目は敵に呉れてやつてもよい。一本目は必ず自分でとれ。命は一つしかない。二つとないのだ。初一本を重視する物の見方、考え方が最も大切だ。典範令に示す機先を制することもこれから始まるのだ。軍人は実戦第一主義でなければいけない。私は少尉の頃より、この信条で通してきた。また、人の試合を見たり審判するときでも、これを最も重要視している。しっかりと、心掛けてやつてくれ給え」と、阿南軍司令官は自ら構え刀の姿勢をとり敵をグッと睨

めつけた姿勢で、懇々と私の如き少尉に諭された。小川聯隊長は「奥本少尉まいか、よい教えを頂いた。他の将校たちにも、そう伝えよ」と言われた。私は、これはよいお訓えを頂いたものだと信じ、それ以後の戦闘にも、また部隊を転勤して大東亜戦争に空挺部隊でパレンバンに降下転戦したときも、この訓えを胸に抱いてやり遂げたつもりである。これがあつて私は昭和十八年二月、陛下に拝謁を仰せ付かつて上京した際も、閣下に一言「お訓えを体してやりました」と報告したかつたが、折悪しくご不在で会えなかつたのは残念でした。

私は仕事の暇をみては、戦傷の両足をこらえても、学生たちの剣道練習の相手をしているが、いつも、このお言葉を思い出しています。



陸軍大将阿南惟幾茶毘之碑
赤玉石